

校長ニューズレター(第20号・11月号) 宜野湾市立長田小学校校長:横山芳春



質の高い授業でそだつ信頼関係

4年3組の謝花先生が研究授業をおこなった。6月のことで教材は国語・詩「春のうた」(草野心平)。協働授業という形をとり、いっしょに授業をしたのは西江重勝先生。

春のうた (草野心平)

ほっ まぶしいな。

ほっ うれしいな。

みずは つるつる。

かぜは そよそよ。

ケルルン クック。

ああいにおいだ。

ケルルン クック。

ほっ いぬのふぐりがさいている。

ほっ おおきなくもがうごいている。

ケルルン クック。

ケルルン クック。

この詩に、「ほっ うれしいな」という表現がある。

担任の先生が、A男に、「ほっ」という言葉が出てきた理由はと発問。A男「うれしいから」。担任「うれしいと『ほっ』と言う理由は?」。A男「わからん」。すると周りの子どもたちが、手を上げだして「分かった!分かった!」と騒ぎ出す。ここで西江先生がバトンタッチ。

西江先生「わからんということはないです。考えてみなさい」。A男「・・・」考え始めた様子。それと、西江先生は、「友だちが考えている。みんなは静かに待ってあげること。みなさんも一緒に考えてください」とたしなめた。(30秒ほどたって) A男が、「ずっと土の中で冬眠していて、春になってやっと出てきたのでうれ

しい」と答える。それを聞いて学級の子どもたちは、拍手をした。この拍手は、形式的なものではなく、心からの拍手であった。授業後、謝花先生にA男のことを話題して話しかけると、この子はこの授業のヒーローになったとのこと。

A男の「わからん」という発言で、教師がすぐにほかの子どもに意見を求めていたら、A男はヒーローになれなかった。さらに学級の子どもたちも、A男を尊重して待ってあげたり一緒に考えることはできなかったであろう。先生の授業の展開によって、授業は子どもと子ども、教師と子ども間の信頼関係を育てたり、子どもと子どもの間に聞き合う関係(この授業の場合は、友が考えているときは、待ってあげる)を育てたりできるのである。また、別の方向にもいくことができるのである。自分の意見さえ発言できればいいという考えを助長することにもなるのである。

つぎは、総合表現に取り組んでいる子どもたちの感想。昨年度のこと。

「つぎにぼくが、これはすごいと思ったのは、五年一組のB男君です。まえまではみんながこういっていました。『B男、声だせ!』。でも川嶋先生がきてからは、声のできて学校ではみんなから、『B男、やればできるじゃん』とB男も笑顔になってきています。」(五年二組Dさん)

日頃みんなの前であまり大きな声のさせないB男が、総合表現の授業のなかで大きな声をだせた。友だちにほめられてこの子も笑顔をみせてくれた。授業でできないことができるようになり、それを友だちが認めほめている。新しい人間関係が始まっているのである。

授業の質が高くなると、子ども達の人間関係をよい方向に導くことができます。なお、沖縄県教育庁も「生徒指導機能を生かした授業づくり」を強く奨励しています。